エレンコスとソクラテス

小　島　和　男

1. 本小論の目的

本小論の目的は、ヴラストスが作り上げた「エレンコスによって鍛えられた可謬的な知をもつソクラテス」といったソクラテス像に疑問を提示することにある。「エレンコス」という装置を案出したのはよいとしても、その中で使われる命題や、ソクラテスが知の表明をするその他の命題に対して、それがエレンコスによるものだとするのはおかしい。というのも、エレンコスの中でエレンコスによるものが使われるのだとしたら、ではそのエレンコスのはじめはどういう事態だったのだろうか。エレンコスによって鍛えられていくべきそもそもの命題は、ソクラテスは最初どのようにして思いついたのだろうか。プラトンの作品に中にそれに対する説明はなかった。よって、本小論では、ヴラストスのソクラテス像にメスを入れながら、エレンコスを、ヴラストスのようには、強調しない形で、プラトンのソクラテスを読む、といったことに挑戦したい。

2. ソクラテスを研究すると言ったときの問題

ソクラテス像を研究すると言ったとき問題になるのが、史実の、所謂歴

史的ソクラテスとプラトンの描いたソクラテスの問題である。これには、歴史的ソクラテスなど扱いはしない、プラトンの作品の中の登場人物ソクラテスを扱いたいのだと答えよう。すると次に問題となってくるのが、どの作品の中のソクラテスを扱うつもりなのかということであろう。

ヴラストスおよび最近で言えばブリックハウス＆スミスなどは、詳しい説明を以って初期対話篇のソクラテスが史実の哲学者ソクラテスを映し出しているのだとし、研究している[1)]。

しかし、簡単な説明をして早く話を進めたい。そのためにはこう言おう。

プラトンの作品を研究する。その作品の中にはソクラテスという登場人物が出てくる。その登場人物を研究する。例えば、チャンドラーの描いたフィリップ・マーロウについて考えるというように、プラトンの描いたソクラテスについて考えるのである。もっと近い例もある。行友李風が戯曲で描いた月形半平太について考え、そのモデルとなった武市瑞山については考えるのではないというように、プラトンが対話篇で描いたソクラテスについて考え、モデルとなった歴史的ソクラテスについて考えるのではない、のである。

では、ソクラテスが登場しているプラトンの対話篇をすべて同列に並べて、その中の登場人物ソクラテスをひとつにして語ってしまってよいものだろうか。そうするにはまず、ブランドウッドの年代決定論[2)]、つまり現在のプラトン研究を席巻している対話篇の執筆年代決定論にメスを入れなければならなくなるだろう。

したがって、本小論では、それをする覚悟はないため、やはり扱う対話篇を限定しなければならないだろう。となると、本小論の目的は、ヴラストスのソクラテス像に疑問を提示することにあるわけであるから、ヴラストスが、歴史的ソクラテスのものだと考え、ヴラストスの言うエレンコスがある対話篇の中からいくつかをとりあげようと思う[3)]。具体的には、『ゴルギアス』、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、そして『国家』第１巻である。

3. ヴラストスのソクラテス

ヴラストスは、“The Socratic elenchus” において、以下のようなソクラテス像を提示する[4)]。

> 命題 p を主張する相手に対して、エレンコスによって～p を認めさせる。その際に、ソクラテスは相手に q、r といった命題に同意を取り付け、そこから～p が帰結することを論じる。その際に、ソクラテスは q、r についてそれが真であると知っていなければならない。かつそれは対話相手から引き出されるものである。ソクラテスは p を聞いたとき、それが偽なる倫理的信念であると確信し、エレンコスを始める。よってソクラテスは「偽なる倫理的信念を持っている者は誰であれ、常にその偽なる信念の否定を必然的に帰結する幾つかの真なる信念を同時に持っている」と確信していることになる。この確信を、ソクラテスはその経験から保証していた。そこから「ソクラテスの倫理的信念の体系は、彼が支持するかぎり常に真である」という結論が導かれる。

またそこで、ヴラストスは主に『ゴルギアス』におけるソクラテスのポロスとの対話部分[5)] をとりあげ、～p、q として、以下をあげている[6)]。

～p：「不正をなされることはなすことよりもよい」
　q：「不正をなすことはなされることよりも醜い」

このソクラテス像は、ソクラテスの所謂「無知の自覚」と一見齟齬をきたすように見える。プラトンはソクラテスに、『ソクラテスの弁明』21D で、「善美のことは何一つ知らない」と言明させているにもかかわらず、

ヴラストスの解釈ではそのソクラテスが、「q、rについてそれが真であると知っていなければならない」からである。またもちろん、～pも真であると知っていなければならない。そうでなければ「pを聞いたとき、それが偽なる倫理的信念であると確信」できないからである[7]。なお、～p、q、rとは倫理的なものであるわけだが、それらが「善美のことがら」とは別物だということでもなければ、「善美のことは何一つ知らない」という言明と齟齬をきたすことは明白である。

この問題は、『ソクラテスの弁明』内にすでにあるソクラテスの「知の表明」と「無知の自覚」の齟齬をどう解釈するか、という問題と融合する。「無知の自覚」を語る『ソクラテスの弁明』のソクラテスは「他方、不正を犯したり、それが神であれ人間であれ、よりよい者に従わないことが、悪かつ醜であると、私は知っています」（29B）とも言っているのである[8]。

その問題に対してヴラストスは、“Socrates' disavowal of knowledge”において答えている。

> ソクラテスが知っていると言う知識は、「エレンコスによる知識（knowledge$_E$）」であり、知らないと言う知識は「確実な知識（knowledge$_C$）」である。「エレンコスによる知識」とは、ソクラテスがエレンコスによって得た知識である。ソクラテスが真であるとする命題はすべてエレンコスにより導入されている。『ゴルギアス』509Aの「鉄と鋼のロゴス（*σιδηρὸς καὶ ἀδαμαντίνος λόγος*）」も、正にこれを指している。

さらに、ヴラストスは、そういった解釈を土台に *Socrates: Ironist and Moral Philosopher* においては、『ソクラテスの弁明』における「無知の自覚」のirony としての側面を強調する。その強調を要約すると次のようになるだろう。

ソクラテスの駆使するirony は、ある発言で、反対の内容だけでなく、文字通りそのままの内容も表わしているirony である[9]。つまり、「無知の自覚」の表明においてソクラテスは、実際自分は「エレンコスによる知識」を持ちつつ（反対の内容)、「確実な知識」を持っていない（文字通りそのままの内容)、と言っていることになるのである。

もう少し付け加えながらそれらをまとめるとこうなる。

ソクラテスは、「エレンコスによる知識」は持っているが、「確実な知識」は持っていない。「エレンコスによる知識」とは、エレンコス内にあらわれる～p、q、r および、ソクラテスが知を表明する場面であらわれる諸命題である。これらは、それまでソクラテスがエレンコスによって鍛え上げてきたものであり、可謬的ではあるが、真であると確信しているものである。「無知の自覚」はirony であり、それで以ってソクラテスは、自分が持っている知は可謬的なものであって確実なものではないと言いたいのである。

本小論では、“The Socratic elenchus” におけるヴラストスの分析自体には賛同したい。確かにソクラテスは、～p、q、r を真なるものとしていた。また、いくつかのソクラテスの知の表明にあらわれる命題も、文字通りソクラテスは知っていたと言ってよいであろう。

しかし、それらは本当にエレンコスによるものであり、また、だから可謬的なものであったのだろうか。

4. ヴラストス以降の解釈者たち

しかし、以降の解釈者たちがヴラストスのソクラテスについて疑問に思ったのは、その「エレンコスによる知識」に関してよりも、むしろ「確実な知識」に関してであった。というのも、ヴラストスは、最期まで、その「確実な知識」に対する解釈をはっきりとはうちださなかったからである。

まず、リーヴと、おそらく彼にヒントを得たブリックハウス＆スミスの流れがある[10]。リーヴは、所謂「技術の例え」からヒントを得て、ソクラテスの知らないという知識を、"expert knowledge, craft knowledge, τέχνη" とし、ソクラテスの知っているという知識を "non-expert knowledge" としたのだが、おそらくそれをもう少し丁寧におっていったのがブリックハウス＆スミスだと言える。リーヴとブリックハウス＆スミスを一緒の流れで語りたい理由は、その二つの解釈に共通の、注目しているであろう箇所があるからである。それは、ソクラテスが『ソクラテスの弁明』において職人たちに感心している箇所である[11]。

また、ブリックハウス＆スミスは、ソクラテスの知らないと言う知識をwisdomと称する。曰く、ソクラテスの求める知は、"the kind of knowledge that is constitutive of wisdom" である。つまり、単なる命題的な知識knowledge（知識）ではなく、wisdom（知恵）を構成する知識である。それを持っていれば、正しいことがいつでもできる、そんな能力である。ソクラテスが真であると確信する様々な命題、それをソクラテスは、ヴラストスの解釈に沿うようなエレンコスで以って、可謬的にとはいえ、真であるとは知ってはいるが、どうしてそれが真なのかは知らない。その「どうして」を、理由を、ブリックハウス＆スミスはwisdomにもってくる。だから、それを持っていれば、正しいことがいつでもできるのである。

この、「ソクラテスの知っている知識―ソクラテスの知らない知識」と

いう対比を「諸命題—理由（根拠）」という対比とパラレルに考える姿勢は、岩田の解釈にも見てとれよう[12]。

曰く、ソクラテスは倫理的真理について断片的な基礎知識しかもっていなかった。それらを纏める原理的体系的な一般理論をソクラテスはもっておらず、求めていた。それは断片的な倫理的諸真理を一緒に集約する何か根本的な洞察であり、カントの『実践理性批判』の体系全体が一個の定言命法に収斂するのに似ている。そしてカントの定言命法の背後に「われわれのうちなる神」が要請されていたように、ソクラテスの求めたその根本的な洞察もソクラテスの深い信仰と結びつくものであった。

「倫理的真理について断片的な基礎知識—それらを纏める原理的体系的な一般理論」という対比を岩田は考えたわけである。

しかし、そのような関係性は、プラトンの対話篇中、どこでも言われていないように思われる。

岩田も、ヴラストス批判から、そういった解釈を打ち出しているわけではあるが、「ソクラテスの知っている知識—ソクラテスの知らない知識」が「諸命題—理由（根拠）」であるという枠組みはいま述べたように変わってはいない。だが、その前にしている洞察は鋭い。岩田は、「いかなる仕方においてでも、意図的に、不正を犯してはならない」や「不正を犯すことは不正を蒙ることよりもより醜い」や「不正を為すことと、神であれ人であれ、自分より優れた者に従わないことが、悪であり醜であることを、私は知っている」などの命題[13]が、必ずしもエレンコスによって基礎付けられたのではなく、むしろそれは「確実な知識」だと語っている。

ではこのエレンコスとはそんなに拘らなくてはならないものだったのだろうか。そもそもその点にヴラストスの過ちはあったのではないだろうか。

5. ヴラストスの過ち

ヴラストスは“The Socratic elenchus”のはじめで、「エレンコス」と

いう言葉が近代の産物であり、ソクラテスがこの言葉を使っていないこと、自らの探究の方法をそもそも名づけてもいないことを明らかにしたが、研究を進めていくにつれて、それを忘れてしまったらしい。ソクラテスは、自らの方法を「エレンコス」と名づけたことはないので、それによってとある何かを生み、つまり「エレンコスによる知識（knowledge$_E$）」を生み、確証していったという意識があったかどうか、そういった設定をもってプラトンがソクラテスを描いていたのかが根本的な疑問として浮かんでくる。

また、ヴラストスは、“The Socratic elenchus”では、ソクラテスが「真なる倫理的信念の体系」を持っていることを強く打ち出すが、それを“Socrates' disavowal of knowledge”で「エレンコスによる知識」と言ってしまっている為、若干の修正を必要とした。しかし、ヴラストスは、ソクラテスが命題の真偽をはじめから知っていたことを否定はしない。それはヴラストスによる『ゴルギアス』の分析から明らかである。では、どういうことなのか。それには、ヴラストスはそこまで考えて、エレンコスによって知が鍛えられていくといったような信念が捨てられなかったために、先の irony に話を進めなければならなかった、というような想像ができる。ここに至って、ヴラストスは自分のソクラテス像をぼやかしてしまったと言えるだろう。*Socrates: Ironist and Moral Philosopher* におけるソクラテス像は、最初の“The Socratic elenchus”のソクラテス像と一致しかねるように思われるのである。「無知の自覚」という irony により[14]、エレンコスによる自らの可謬的な知を irony とはいえ否定するソクラテスと、『ゴルギアス』におけるエレンコスにおいて無敵で自信たっぷりのソクラテスとは、一致しかねるのである。

6. 鉄と鋼のロゴス

ヴラストスは、主に『ゴルギアス』におけるポロス論駁を中心に、ソク

ラテスの対話に細かく正確な分析を加え、エレンコスを取り出す。しかし、ヴラストスも言うようにソクラテス自身がそのエレンコスについて言及するところはほとんどない。だが、「ほとんど」といったように、ひとつだけ例外的に、印象深い言葉で、エレンコスのことが言われていると、ヴラストスが解釈している箇所がある[15]。

『ゴルギアス』の中のその箇所において無敵で自信たっぷりのソクラテスは、自分の提示する命題を「鉄と鋼のロゴスで以って（*σιδηροῖς καὶ ἀδαμαντίνοις λόγοις*）」確実なものになっているのだというのである。この「鉄と鋼のロゴス」がエレンコスのことを示しているとヴラストスは解釈している。

では、その箇所を詳しく見てみよう。『ゴルギアス』508E～509A である。

> *ταῦτα ἡμῖν ἄνω ἐκεῖ ἐν τοῖς πρόσθεν λόγοις οὕτω φανέντα, ὡς ἐγὼ λέγω, κατέχεται καὶ δέδεται, καὶ εἰ ἀγροικότερόν τι εἰπεῖν ἔστιν, σιδηροῖς καὶ ἀδαμαντίνοις λόγοις,*

> それらはさっき、前の議論のあそこで、僕たちにそうだと明らかになっていたのであり、僕に言わせてもらえば、抑え付けられ、縛られているのであって、またちょっと乱暴な言い方が出来るなら、鉄と鋼のロゴスで以ってそうされているのであり、

ヴラストスはもちろん、*ἐν τοῖς πρόσθεν λόγοις* の、*τοῖς πρόσθεν λόγοις* を *σιδηροῖς καὶ ἀδαμαντίνοις λόγοις* と呼んでいるととり、*ἐν τοῖς πρόσθεν λόγοις* がポロスをエレンコスによって論駁する箇所なので、エレンコスをさして、*σιδηροῖς καὶ ἀδαμαντίνοις λόγοις* だと言っているととったのだろう。しかし、その解釈は、過ちではなかろうか。

そもそもヴラストス自身が明言しているように、ソクラテスはエレンコ

スという言葉を使っていないし、自らの探究の方法をそう名づけてもいないわけである[16]。もしそういった方法をさしてそれに「鉄と鋼の」などと言いたいのなら、それはそもそも複数形で書かれるだろうか。

次のような解釈はどうだろうか *σιδηροῖς καὶ ἀδαμαντίνοις λόγοις* のロゴスはそのまま「言葉」・「論理」の意味で使われている。複数形で書かれているのは、その議論の中で使われた諸々の「言葉」・「論理」を表しているからであり、ソクラテスは、そこで使われた「言葉」の意味や「論理」の正しさを「鉄と鋼の」と言ったのである。

エレンコスが鉄と鋼に比されているのではなく、個々の言葉の意味やその論理的な整合性が、「鉄と鋼の」と形容されているのである。エレンコスという想定が、ヴラストスによって勝手に作り上げられたものである以上、それを排除して解釈できるなら、そうするほうが自然であり、ギリシア語の文章の解釈としてスマートであると言えるのではないか。「鉄と鋼のロゴス」はわざわざエレンコスだとしなくともよいのである。

では、この「鉄と鋼のロゴス」とは、「鉄と鋼の」「言葉」の意味や「論理」の正しさとは、一体いかなることを言っているのかを考察していきたい。この考察はソクラテスの「知の表明」と「無知の自覚」の齟齬をどう解釈するかという問題の解決と繋がっている。

7. ソクラテスの知っていることどもの特徴

伊集院は、「ソクラテスが知を表明する命題は極めて範囲の限定されたものであるからである。初期対話編において明確にソクラテスが知を表明するものに関して言えば、それはほぼ、分析命題的な必然性を持つ命題か、徳、特に正義が善いものであるという命題に限定されているということに、我々は注目しなければならないのである」と語っている[17]。伊集院はこの文章を、「ソクラテスが倫理的な問題の領域において我々が様々な問題に関して真なる解答に達する保証が与えられているわけではないことを明

確に自覚している」ことを明らかにする文脈で語っている。これらは、前者も後者も全く正しい。本小論が強く主張したいのは前者と同じ主張である。つまり、ソクラテスが知っていると表明しているものはすべて、「分析命題的な必然性」をもっているか、「徳が善い」ということだけなのだということを主張したいのだ。しかしこれは一つにまとめられるだろう。「徳（ἀρετή）」というギリシア語の意味を考えたとき、それ、つまり「徳が善い」という命題も、「分析命題的な必然性」をもっていると言えてしまうからである[18]。

では、以上を踏まえて、以下の知の表明の箇所を見てみよう。

「他方、不正を犯したり、それが神であれ人間であれ、よりよい者に従わないことが、悪かつ醜であると、私は知っています」（『ソクラテスの弁明』29B）

加えて、先の、『ゴルギアス』における～p と q、

～p：「不正をなされることはなすことよりもよい」
q：「不正をなすことはなされることよりも醜い」

また、それに『クリトン』におけるクリトンとの議論のアルケーと呼ばれる同意事項も考慮に入れたい[19]。

「いちばん大事にしなければならないのは生きることではなくて、よく生きることだ」（『クリトン』48B）
「“よく”と“美しく”と“正しく”は同じである」（『クリトン』48B）

その他、すべてソクラテスが積極的に主張することは、すべて、「分析命題的な必然性」をもっている。

こういった言葉の意味の極めてラディカルな使い方に関しては、『国家』第1巻における「厳密論（ὁ ἀκριβὴς λόγος）」について言われているところが、その説明になるだろう。

8. ソクラテスの厳密論

「厳密論」という言葉は、トラシュマコスの口から、『国家』第1巻340D〜341Aにおいて説明される。

> ソクラテスは病気の治療に関して失敗する医者を、その点で、医者とは呼ばない。しかし、言葉の上では我々は、医者が失敗したとも言う。が、本当のところ、専門家は、その名の通りにあるのなら、決して失敗しないのである。そのような厳密論によれば、専門家はその専門において、決して過ちを犯さない。

このような厳密論をソクラテスは議論のときに用いているのだと、トラシュマコスは看破するわけであるが、この厳密論が、さきの倫理的なことがらに関する「分析命題的な必然性」と繋がってくるのではなかろうか。「よい」という言葉を、諸々の徳を、この厳密論で言われているような形で極めてラディカルに使うとどうだろう。失敗をしない医者、失敗をしたらもうすでにその人は医者ではない、という意味で「医者」という言葉を使うわけだ。少しでも「よくない」要素が入っては「よい」ではない「よい」である。だから本当に「よい」人には決して悪いことはおこらない[20]、との言はそういった「よい」の厳密論に従った使用であるのではないだろうか。

とすると「“よく”と“美しく”と“正しく”は同じである」も納得がいくだろう。厳密論を徹底すれば、「よい」側のポジティヴな意味の言葉、プラス方向の言葉は、決してお互い齟齬をきたさず、反対のものの原因に

なることはない、となることは明白である。厳密論は「悪の美」などというような倒錯的な美を許さない。それは「医者だけれども失敗する」を受け入れているのと同じだからである。

それでも、「“よく”と“美しく”と“正しく”は同じである」の意味は問題になりがちかもしれない。というのは、この命題は、分析命題的な整合性をソクラテスの厳密論に与える、それこそアルケーとして機能するのであり、これ自身は分析命題的な必然性を持たないという反論も予想できるからである。この命題は、ソクラテスの語の用法における意味論的な決意と言ったほうがいいかもしれない。それはそれぞれ、「よい」、「美しい」、「正しい」という3つの形容詞で修飾できるものの内包や外延といったことで考えられるようなものではなく、「よくないけれど美しい」、「美しくはないが正しい」などということが、特に人間の行動の場面において、決してないということを謳っているのである。だからその3つは、副詞の形で語られているのである。

ともあれ、話を元に戻すと、ソクラテスはあくまでも、そういった言葉をそのようにラディカルに、「厳密論」に従って捉え、使用していたわけであり、そこから出てくる命題については自信をもって「知っている」ともソクラテスは言っているわけだが、当たり前の事実として、それはそうとしか言わない、そんなソクラテスをプラトンは描いていたと言える。

ヴラストスに沿って言おう。“The Socratic elenchus”における彼の分析は正しい。しかし、ソクラテスが支持している倫理的信念の体系（つまり、qやr）は、長年のエレンコスによって培われてきたものではなく(そんなこと、プラトンは一言も言っていない[21])、「厳密論」に従った言葉の使用なのである。それは決して経験的なものではない。また実践的なものではないのも明らかであろう。しかし対話篇の中では、それに従っていく限り、無敵のソクラテスをプラトンは描いたわけで、それで「鉄と鋼のロゴス」と言わせしめているのではなかろうか。というわけで、やはり、この「ロゴス」は、決してエレンコスのことを指してはいない。ソクラテ

スの使う「言葉」の意味や「論理」の意味でとればよく、それはエレンコスではない。

だとすると、ソクラテスが知っている知は、そのように厳密論的な言葉の用法から導かれた様々な分析的な命題であり、ソクラテスが「無知の自覚」で語る知らない知は、irony で言っているのではなく、本当に、「美にして善なるものども」を知らないのである。端的に、何がよくて何が美しいか、人を殴ることがよいことなのか、戦争に行くのが美しいことなのか、個別諸々のことにおいてどれが善なのかを知らないのである。ここのソクラテスの知らない知に関しては、ブリックハウス＆スミスの言い方も的を射ているかもしれない。ソクラテスが得たい、求める知、神だけが知っているその知は、それがあれば決して間違うことのなく、正しく、よく、美しく行動し生きて行ける能力であり、所謂完全な wisdom なのであり、それがないが故に、個々の「美にして善なるもの」を知らないのである。

9. ソクラテスのした行動

ではどうしてソクラテスはよい行動ができるのか。換言すればすべてが「よいものはよい」程度に収まってしまうような、中身のない、現実的でない様々な命題を寄せ集めて、どうしたらよく生きようとすることができるのか。実はその答えが、近代の解釈者たちが「エレンコス」と呼んだ対話による探究活動なのではないだろうか。

例えばこのような思考実験をしてみたい。

絶対的に従わなければならない命令として「〇〇しろ」と言われたとしよう。誰も「〇〇しろ」、「〇〇する」という言葉が具体的にどういった行動をあらわしているのか知らないだろう。「〇〇しろ」とは「〇〇」に何かを当てはめるというわけではない。だとしたら、「〇〇する」為にはまずどうしなければならないのだろうか。それにはまず、「〇〇」を探求することが必要となってくるのではないだろうか。「〇〇」が何かを探求し

ていくこと、それこそが、わけが分からないながらも、「○○する」を知らない人が、「○○しろ」という命令に従っていく唯一つの方法なのである。

しかし、どうして「○○し」なければならないのだろうか。その人は時にそう考えてしまうだろう。しかし、これが「よく生きる」ということだったらどうだろうか。その上、その「よく」を、先の「厳密論」に従って、極めてラディカルな意味で使っていたとしたら。そこまで理解できている人ならばどうして「よく生き」なければならないのか、といった疑問はでてはこないだろう。何であるかわからないが絶対的に目指すべきものを目指すべき、と言われているに等しいことだからである。「何故目指すべきものを目指さねばならないのか」に対しては「目指すべきものだからだ」と答える以外になく、その目指すべきものが何なのかをとりあえず探求するという仕方で、その要請にこたえるしかないのである[22)]。

このように考えれば、また、～p、q、rを「エレンコスによる知」ではなく、ただの分析命題的な整合性を持った言明であると見なせば、一見傲慢すぎる嫌いのある“The Socratic elenchus”のソクラテスもうまい具合に修正が出来るだろう。（敢えてこの言葉を使えば）エレンコスによって、対話を続けるソクラテスは、相手が厳密論的に整合性を持った言明をしていないため、自信を持って相手を論駁できる。いくらでも論駁できるのである。

10. 結論および今後の課題

以上で、ヴラストスの言うような「エレンコスによる知」という解釈をわざわざしなくても、「無知の自覚」と「知の表明」のパラドックスも解消でき、整合的に対話篇内のソクラテス像を構成できるということが明らかになったと思われる。構成されたソクラテス像は、倫理的な事柄に関する命題を、他者との対話において、厳密論に従って確信を持って提示し、

それに基づいて相手を論駁する。しかし、ソクラテスは、「無知の自覚」に現れているように、具体的に個々の出来事、行為にそれらがどう適応されるかについては何も知らない。例えば、「奴隷を殺した父を訴えること」がよいことかどうかを判断できる知などはもっていないのである。しかし、プラトンの描いたソクラテスは対話をやめることはないだろう。それが「よく生きる」唯一の仕方であり、「よく生きる」ことは厳密論の観点から、厳密に言葉を、ロゴスを使って生きるのだとしたら、従わなければならない絶対的な命令であったからである。

このソクラテス像はひょっとしたらヴラストスの提示するソクラテス像と比べて、面白みにかけるかもしれない。しかし、そこからは次のようないくつかの興味深げな問題が出てくる。そのようなエレンコスなき（つまり、経験により蓄積された知というモチーフのない）痩せたソクラテスをプラトンが描いた意味はどこにあったのか、また、プラトンは対話篇を描いたときにヴラストスが誤解したように読み手が誤解するとは考えなかったのだろうか、さらにはまた、考えていたとしたら、どのような意図で、誤解されてもよいような形でそのソクラテスを対話篇内に描いたのか。それらは今後の課題としたいと思う。

補論　ソクラテスの意図

ソクラテスが対話相手に接するとき、そのはじめに、その対話相手から本当に何かが知れると、知りたいことを相手が話してくれると目論んでいたのかどうかに疑問を感じるプラトンの読者は多いだろう。「教えてくれ」とソクラテスは言うが、それが本音なのか、皮肉（irony）なのか。もしかしたら、『ソクラテスの弁明』30A～31B で言っているように虻として、その人の生き方を吟味し、啓蒙する為だけに対話を行っている可能性もあるからである。その場合、「教えてくれ」は明らかに皮肉であろう。

つまり、ソクラテスの対話の意図はどこにあったのかということである。

ちなみにヴラストスは、ソクラテスの対話の意図を、ほぼ、対話相手の生き方の吟味として捉えている。

こういった問題に、本小論で提示したソクラテス像をふまえて考えてみると、以下のように答えられるだろう。

ソクラテスは、「よく」を、「目指すべきもの」の中身を、wisdom を、自分の持っていない「知」を探ろうとして対話していたというようにプラトンは描かなければならなかった。だとしたら、皮肉であれ、本音であれ、「教えてくれ」というようにソクラテスは対話相手に語りかけるしかない。対話前に相手のことを断定できるはずもなく、「よく」などの中身も知ってはいないのだから。そして、相手と対話をしていくことで、ひょっとしたら厳密論を超えたそれよりも説得的な論で以って自分を打ち負かしてくれる相手がでてくるかもしれないし、厳密論が超えられなくとも、その対話の中で、自分の気がついていなかった間違いに気付き、そこで何かを発見できるかもしれない。そうソクラテスが考えている可能性を、少しでも読者に残す形でプラトンは描いたのである。それは、実際うまくいくはずもない、絶望的な知の愛求であるが（というのもそれをそもそもプラトンは登場人物ソクラテスに成功させていない）、そういった仕方でしか、「よく」に関して対話をするという仕方でしか、「よく生きる」ことは出来なかった、そういったソクラテスをプラトンは描いたのである。

注）

1) cf. Brickhouse & Smith (1989), pp. 1～10.
2) Brandwood (1990).
3) cf. Vlastos (1994), p. 135.
4) ヴラストスの論文、"The Socratic elenchus" (1983) と "Socrates' disavowal of knowledge" (1985) に関する箇所の表記は、Vlastos (1994) に再録されているものを指した。Vlastos (1994) のほうが手に入りやすいだろうからである。ちなみに "The Socratic elenchus" は再録版では、"The Socratic elenchus : method is all" という題名になっており、大幅に書き直されてはいるが、本小論にはどちらであっても影響しない。

5) 『ゴルギアス』474C～475E。
6) Vlastos (1994), p. 19.
7) 「確信する」と「知る」の違いについてだが、ギリシア語では、*ἡγέομαι* と *οἶδα* の違いということになろうか。というのも、以下のソクラテスが知を表明する命題においてはその両方が使われているからである。ただ、そこでは *ἡγέομαι* が使われていようとも、ヴラストスが看破したように、ソクラテスは真であると知っていなければ、相手を論駁できていないのである。
8) 本小論でも4節で追うことになるが、その研究史は、加来（2002）に非常に詳しい。
9) こういった irony をヴラストスは、complex irony と呼んでいる。
10) Reeve (1989) および Brickhouse & Smith (1994).
11) 『ソクラテスの弁明』26C～E。
12) 岩田（1995)。
13) 命題の引用は岩田による。
14) そもそも、『ソクラテスの弁明』のなかで「無知の自覚」が出てくるということを考えたときに、それを irony というように呼ぶのはどうだろうか。『ソクラテスの弁明』においてソクラテスは真実を思いつくままの言葉で語っているのである（cf. 17B～C)。
15) Vlastos (1994), p. 59 および p. 137。
16) Ibid. pp. 1～2.
17) 伊集院（1995)、15頁。伊集院もあげているが、このような、知の表明の箇所を分析命題のようなものとして処理する解釈の可能性を示唆しているものには、Morrison, p. 20, n. 10 および Reeve, p. 111 がある。脇條（1995）もそれに近いといえるだろう。脇條は、「Soc. が推論そのものに対して表明しているように見える知は実は推論の論理に対する知に過ぎない」という言い方をしている。なお、伊集院は、伊集院（1998）では、そのように解釈する立場をやめてしまっている。
18) このように解釈している。あるいはその可能性を考慮している研究者については前注で挙げた通りだが、彼らの論があまり支持されていないのは、おそらく、ソクラテスを歴史上の偉人ソクラテスとしてみていて、そのような生身のソクラテスがいて、現実のアテナイで、2500年以上も前にだが、物を食べたり考えたりしていた、そんな彼の言行録と考えて、対話篇を読んでいる研究者が多いからだろう。もちろんそれは研究方法の可能性のひとつであるし、積極的に否定するつもりはないが、私は、プラトンの対話篇はあくまでもプラトンの作品であり、ソクラテスが何を考え何を言ったかではなく、プラトンがどうして登場人物ソクラテスにそう言わせたか、を考えたいと思っている。
19) これらは、『クリトン』において、今まで論じてきて同意されてきたものだと

語られる。これこそ、ヴラストスに言わせれば、エレンコスによって培われてきたqであるとなるわけだが、今まで論じてきたその様子は現存のテクストには残っていない。クリトンがそれに反対して論駁されたという記述はない。おそらくプラトンは書いていない。だとしたらどうしてずっとエレンコスに耐えてきたものなのだろうか。それらはあくまでも必然性を持つがゆえに、ソクラテスとクリトンの間で何度も対話し、確認、同意してきたのだとは読めないだろうか。プラトンはそれらを『クリトン』で根拠なしに出してきている。そこがポイントなのだと考えたい。

20) cf.『ソクラテスの弁明』41C～D.

21) 換言すれば、「プラトンはエレンコスという秘密の装置を読者に暴いて欲しかったので明記しなかった」という説明と、「プラトンは使用している言葉そのものの意味や論理の問題のため、敢えてそこを突っ込んで説明はしなかった」という説明はどちらが説得的だろうか、ということである。

22) そもそも「死にます」というオプションもあるが、それを選ばない理由は『パイドン』の所謂自殺禁止論において語られているのではないだろうか。また『ソクラテスの弁明』全体からもそれは読み取れるかもしれない。プラトンはソクラテスに、「死刑でいいです」とは言わせずに弁明させているからである。

参考文献

Burnet, J., *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, and Crito*, Oxford : Crarendon Press, 1924.

Brandwood, L., *The chronology of Plato's dialogues*, Cambridge ; New York : Cambridge University Press, 1990.

Brickhouse, T. C., & Smith, N. D., *Socrates on trial*, Oxford : Clarendon Press, 1989.

Brickhouse, T. C., & Smith, N. D., *Plato's Socrates*, New York ; Tokyo : Oxford University Press, 1994.

Brickhouse, T. C., & Smith, N. D., *The philosophy of Socrates*, Boulder, Colorado : Westview Press, 2000.

Kraut, R., "Comments on G. Vlastos, 'The Socratic Elenchus' ", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* I, 1983, pp. 59–70.

Kraut, R. (ed.), *The Cambridge Companion to PLATO*, Cambridge ; New York : Cambridge University Press, 1992.

Morrison, D. "On Professor Vlastos'Xenophon", *Ancient Philosophy* 7, 1987, pp. 9–22.

Reeve, C. D. C., *Socrates in the "Apology"*, Indianapolis : Hackett Publishing

Company. 1989.

Vlastos, G., "The Socratic elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* I, 1983, pp. 27–58.

Vlastos, G., "Afterthoughts on Socratic elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* I, 1983, pp. 71–74.

Vlastos, G., "Socrates' disavowal of knowledge", *Philosophical Quarterly* 35, 1985, 1–31.

Vlastos, G., *Socrates : Ironist and moral philosopher*, Cambridge : Cambridge University Press, 1991.

Vlastos, G., *Socratic Studies*, Cambridge: Cambridge University Press, 1994.

伊集院利明、「『メノン』編における論駁法とソクラテスの知」、日本倫理学会編『倫理学年報』第四十四集、1995年、3–18頁。

伊集院利明、「『弁明』におけるソクラテスの知の表明」、愛知大學文學曾編『文學論叢』第116輯、1998年、1–21頁。

岩田靖夫、『ソクラテス』、頸草書房、1995年。

加来彰俊、「ソクラテスのいわゆる「知の否認」をめぐって—『ソクラテスの弁明』29B6–7への注—」、西洋古典研究会編『西洋古典研究会論集』XI、2002年、1–20頁。

三嶋輝夫・田中享英訳、『プラトン　ソクラテスの弁明・クリトン』、講談社学術文庫、講談社、1998年。

脇條靖弘、「プラトン初期対話篇における知の表明」、日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』XLIII、1995年、42–52頁。

※プラトンからの引用および要約はBurnet版のOxford Classical Textsによった。箇所の表示は一般的慣習（ステファノス版の表記）に従った。

（哲学科　助手）